

日本中世英語英文学会

第 29 回 西支部例会

日時：2013 年 6 月 8 日（土） 13：30～17：20

会場：大阪大学（豊中キャンパス）言語文化研究科

〒560-0043 豊中市待兼山町 1-8

電話 06-6850-6111（代）

（土曜日 090-3824-8617 西支部事務局（和田）携帯番号）

アクセスマップ：<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/access>

キャンパスマップ：<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/access/toyonaka>

総会 豊中キャンパス A 棟 2 階大会議室

研究発表 豊中キャンパス A 棟 2 階大会議室

特別講演 豊中キャンパス A 棟 2 階大会議室

懇親会 ミュージアムカフェ 「坂」

（大阪大学総合学術博物館（MOU）待兼山修学館 1 階）

日本中世英語英文学会西支部事務局

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35

関西大学 外国語学部 和田葉子研究室内

Tel: 06-6368-0656（研究室直通）

E-mail: yoyo@kainsai-u.ac.jp

第 29 回西支部例会プログラム

- I 受付 (12:30～13:30) (豊中キャンパス A 棟 2 階大会議室前)
- II 開会式および西支部総会 (13:30～14:10) (豊中キャンパス A 棟 2 階大会議室)
司会 大野英志 (倉敷芸術科学大学)

〔開会式〕

日本中世英語英文学会会長挨拶	向井 毅 (福岡女子大学教授)
開催校挨拶	木村茂雄 (大阪大学言語文化研究科長)
日本中世英語英文学会事務局報告	西村秀夫 (三重大大学教授)

〔西支部総会〕

事務局報告	和田葉子 (関西大学教授)
会計報告	海老久人 (神戸女子大学教授)
会計監査報告	吉村耕治 (関西外国語大学短期大学部教授)

- III 研究発表 (14:15～15:45) (豊中キャンパス A 棟 2 階大会議室)

1. *Ancrene Wisse, Corpus* 写本における *conscience* の導入表現と受容について
井野崎千代子 (大阪産業大学非常勤講師、近畿大学非常勤講師)
司会 池上恵子 (成城大学短期大学部名誉教授)
2. 14 世紀初期の脚韻詩 *Kyng Alisaunder* における DO と GIN の用法
松沢絵里 (大阪芸術大学短期大学部教授)
司会 西村政人 (豊橋技術科学大学教授)

<休憩>

- IV 特別講演 (16:10～17:10) (豊中キャンパス A 棟 2 階大会議室)
How to administer a late-14th century monastic library: the case of Dover Priory
Patrick P. O'Neill
(The University of North Carolina at Chapel Hill)
司会 中尾佳行 (広島大学教授)

- V 閉会の辞 (17:15～17:20) 壬生正博 (福岡歯科大学教授)

VI 懇親会 (17:45～19:45) ミュージアムカフェ 「坂」
(大阪大学総合学術博物館 (MOU) 待兼山修学館 1 階)
会費 4,000 円

◇**会員控室**は B 棟 1 階小会議室です。

◇**受付、総会、研究発表**の行われる A 棟は 6 階建ての大学院棟、**会員控室**のある B 棟は 4 階建ての旧言語文化研究科棟を指します。この二つの建物は廊下でつながっています。当日は、A 棟の正面玄関より建物にお入りいただけます。

◇**懇親会場**、ミュージアムカフェ 「坂」は、当日ご案内いたしますが、言語文化研究科棟より石橋駅に向けて坂を降りる途中にある大阪大学総合学術博物館の 1 階です。

研究発表 1

Ancrene Wisse, *Corpus* 写本における *conscience* の導入表現と受容について

井野崎千代子（大阪産業大学非常勤講師、近畿大学非常勤講師）

司会 池上恵子（成城大学短期大学部名誉教授）

conscience という英単語の、現存する最古の記録は *Ancrene Wisse* 第 5 章 (*Corpus* 写本他) にあるとされている。*Corpus* 写本では、それはラテン語 *consciencia* の訳語であり、*inwit* が代替語として使われ、それら三つの語彙が同一概念を指すものとして作品内で用いられている。

Ancrene Wisse は、平信徒から隠遁修道者になることを選んだ者への「玄人による指南書」として、ある言葉やフレーズをわかりやすく「説明する」グロスの表現で全体が構成されていると言える。本発表では、*conscience* という概念が、*consciencia*, *inwit*, *conscience* の三つの語彙の使用により、*Corpus* 写本全体を通していかに対象者に伝達されようとしているのかをまず整理する。次に、第 5 章における英語 *conscience* の初の導入は ‘*bet is*’ というグロスの表現によってなされているため、作品全体に見られるこの表現を観察してみた。すると、*Corpus* 書記は当表現を用いる際、パンクチュエーションの使用に、ある種の規則性を持たせていた様子が伺えた。この規則性が認められるとするならば、*conscience* という「英語」の概念が、作品全体として対象者にどの程度「定着」していると言えるのかの一つの判断基準になるのではないかということを検討したい。

校訂本は Tolkien 版 *The English Text of the Ancrene Riwe, Ancrene Wisse* (EETS, 1962) を使用する。

研究発表 2

14 世紀初期の脚韻詩 *Kyng Alisaunder* における DO と GIN の用法

松沢絵里（大阪芸術大学短期大学部教授）

司会 西村政人（豊橋技術科学大学教授）

14 世紀初期の脚韻詩 *Kyng Alisaunder* (KA) には 281 例の DO、および 105 例の GIN がある。DO の用法は①主動詞 (60%) ②代動詞 (12%) ③不定詞と共に起する場合 (28%) ④励ましの間投詞 (*OED* s. v. 32) (1 例、0.3%) の用法があった。一方、GIN の用法は③が 97% で①の主動詞として使われるのは 3 例 (3%) のみであった。

GIN の過去三人称単数形 *gan* は 14 世紀初期の韻文に最も頻繁に見受けられ、*OED* には “the pa.t. *gan* was commonly used in a weakened sense, as a mere auxiliary (= the modern *did*) serving to form a periphrastic preterite” とある。KA には 45 例の *gan* があり、規則的なアクセント付けの結果、強位置に起こる *gan* は 24 例、弱位置に起こる *gan* が 21 例であった。これからすると *gan* は音節を埋めるために迂言的に使われているようである。

KA の DO の過去単数形の内 *dude* は 86 例であるが、それが不定詞を従える例は 44% になり、主動詞の用法の 53% に次いで高い頻度を示す。(DO 全体では主動詞 60%、不定詞を従える場合 28%) KA に現れる DO の過去形はすべて二音節語であるので、規則的なアクセント付けでは必ず強位置に現れる。発表ではこの強位置にくる DO の過去形 *dude* と強弱どちらの位置にも表れる GIN の過去形 *gan* の動詞構造と用法を具体的に調べ、KA での DO と GIN の用法の違いがどこにあるのかを示したい。

特別講演

How to administer a late-14th century monastic library: the case of Dover Priory

Professor Patrick P. O'Neill

The University of North Carolina at Chapel Hill

Chaired by Professor Yoshiyuki Nakao

The University of Hiroshima

A contemporary of Chaucer and also a native of Kent, John Whytefelde was precentor of Dover Priory, a modest foundation of Benedictine monks subordinate to Christ Church Canterbury. Among his duties as precentor was to serve as custodian of the community's library. To facilitate his task, Whytefelde prepared (in 1389) a catalogue of the library's holdings which consisted of about 440 volumes (of which only 22 are still extant). The catalogue has survived and is now preserved as Oxford, Bodleian Library MS 920. It is a remarkable document, not because of the volumes that it records but because of its approach to administering a monastic library. It shows Whytefelde trying to balance the need to secure the books in his charge (without resorting to chaining them to their shelves) with his desire to encourage the Benedictine ideal of a community that read and studies.

To achieve these potentially conflicting goals, Whytefelde composed a remarkable three-part catalogue, in effect three catalogues of the same books. Each one designed with a specific audience in mind and to serve a particular purpose. The present paper will examine the contents of this tripartite catalogue, how it works (using Whytefelde's own directions) and how it compares with other surviving contemporary catalogues from monastic and university libraries.

